JICA開発教育コラム

2022年度
VOL.3

JICA開発教育コラム　2022年度 10月号　　発行：JICA地球ひろば

みんなの学校
わたしたちの学校

今年8月に第8回アフリカ開発会議（TICAD8）が開催されましたが、アフリカではどのような教育協支援が行われているのでしょうか。今回はJICAの「みんなの学校」プロジェクトに携わるJICA専門家の岩田さんに、プロジェクトの特徴や、 現場で直面したエピソード、また開発教育についてお話を伺いました。

岩田　守雄 さん（JICA専門家／参加型教育開発）

大学卒業後、音響技術の仕事に従事し、青年海外協力隊（音響／ニジェール）に参加。帰国後ニジェールに戻り学校保健教育を行う協力隊グループ派遣のリーダーを務める。その後セネガルで学校給食支援事業に携わった後、JICA専門家としてマリおよびセネガルの「みんなの学校」プロジェクトに従事。JICAセネガル事務所勤務（企画調査員／教育分野担当）を経て、現在はマリ国みんなの学校プロジェクトのリーダーを務めつつ、セネガル国　算数教育プロジェクトの専門家を兼務し、西アフリカにおけるSDGsゴール4（質の高い教育をみんなに）達成に向け日々奮闘中。

JICAでは途上国でさまざまな教育支援を行っていますが、その中での「みんなの学校」プロジェクトの特徴を教えてください。

アフリカの教育支援と聞くと、授業改善など「教室の中」の支援を想像されるかもしれません。西アフリカで学校教育が普及したのは割と最近で、世界的な「万人への教育（Education for All）」の推進により学校建設は急速に進みましたが、その維持管理にまで政府の手が回らず数年で老朽化してしまうという問題がありました。また、教員養成も追いつかず、中学の卒業生が短期間の研修のみで「教師」として配置されたり、待遇改善のためのストライキが頻発したり、「教室の中」のみ支援しても十分ではないことがわかってきました。そこで始まったのが**「学校そのもの」を、住民参加型の開発＝「みんなで」支える、この「みんなの学校」プロジェクトなのです。**

なぜ、「みんなで」実行するのですか？

初期の頃は、地域の皆さんが自分たちで学校をよりよく運営できるよう、保護者や地域の役員と校長や教員代表等でつくる「学校運営委員会」を設置し、その委員に参加型学校運営手法に関する研修等を行いました。

最近はさらに、市や県といった地域レベルの教育改善のため、地方政府、自治体、各学校の運営委員会の代表者らが協力し合って地域全体の教育改善策を進めていくための支援や、地域のボランティアが子どもの放課後グループ自主学習を支援するといった学力向上の取り組みを行っています。ドナーによる一方的な支援ではなく、**彼ら自身が考え、話し合い、協力し合って行動することを繰り返すことで、自発的・持続的に開発を進める力が養われ、SDGsが謳う「持続的な開発」が可能になります。**

今の世代のアフリカの保護者の多くは自分自身が小学校に通った経験がなく「子どもを学校に行かせましょう」と言われても、自身の経験に照らして学校生活をイメージすることができません。また、かつて学校教育を持ち込んだのはその地域を植民地化した宗主国なので、警戒心や不信感を抱くのは当然です。もし自分がその立場だったら、子どもを積極的に通わせることは、難しいですよね。だからこそ、**学校が「よその人間が持ち込んだ怪しいもの」ではなく「自分たちで作っていく、自分たちの子どもをよりよく育てるための場所」であることを理解してもらわないといけません。**だから、「みんなの学校」なんです。

「みんなの学校」プロジェクトについて もっとくわしく
学校運営委員会支援プロジェクト フェーズ2(マリ)
学校運営委員会支援プロジェクト・フェーズ2(マリ)ODA見える化サイト
初等教育算数能力向上プロジェクトフェーズ2(セネガル)ODA見える化サイト

プロジェクトの実施にあたって、これまで順調に進まないこともあったかと思います。その中で岩田さんご自身が迷ったことや、考えさせられた、というエピソードを教えてください。

現地の保護者の方に、「あなた自身は、どうして自分の子どもを学校に通わせることにしたのですか？」と聞いてみたことがあります。すると「自分がやってきた畑仕事を生業とするこの生き方はとても苦しい。自分の子どもには、公務員になったり会社に勤めたりして、もっと楽な暮らしができるようになってほしい」と。自分が子どものころは、今のように教育を受ける機会がなく、非常に少ない選択肢の中からこの生き方を選ぶしかなかったが、自分の子どもには学校で学び、**もっと別の生き方ができる可能性を掴んでほしい**、と話していました。

他方、イスラーム教徒が大多数を占めるセネガルでは、全国に大小様々な非正規のコーラン学校があります。イスラーム教徒としての正しい生き方、態度、道徳などを習得し、さらには宗教指導者が営む事業での職に就くこともできるので、公立学校よりも非正規のコーラン学校を選ぶ保護者も多いのです。コーラン学校は、公的な学歴とは認められず、公務員やフォーマルな民間企業での就職の道はほぼ閉ざされるなどのリスクはあります。しかし、**自分が現地の保護者だったなら、自分の子どもを公立学校に通わせて高学歴ニートになるリスクよりもコーラン学校に行かせる方がよほど堅実**、と考えるかも知れないと思うこともありました。このような状況の中、「学校教育の普及」の推進が本当に正しいことなのか頭を悩ませました。皆さんはどう考えますか？

広義においては、コーラン学校も教育のひとつです。日本にもフリースクールなどがあるように、**教育の多様性**という意味では必ずしも学校教育である必要はありません。私たちはついつい**教育問題を学校教育や学力などに限定しがちですが、教育をもっと広く、多角的に捉える視点はアフリカでも日本でも重要だ**と改めて思いました。

みんなの学校　わたしたちの学校

岩田さんが考える開発教育とは、どんなものでしょうか？また開発教育や国際理解教育に取り組む方へ、メッセージをお願いします。

自分が「あたりまえ」と思っている世界は案外狭いですよね。日々の生活に追われてなかなか目を向けにくいですが、**その外側にもう少しだけ目を向け、どう捉え、どう向き合えばいいのか、自分に何かできることはないのか、を考えることから始まります。**国際協力の現場にいる方の話を聞いたり、インターネットで調べたりすることは、そのきっかけになると思います。しかし、**自分が生まれた境遇によって「たまたま」享受している恩恵を、同じように享受できない人は、国外だけでなく国内、自分のすぐ身近なところにもたくさんいます。**生得的特性や家庭環境などにより皆と同じように学校教育を受けることが難しい人や、日本に住む外国につながる方やその子どもたちなど様々です。**「日本の中と外」という分け方ではなく、「自分がこれまで『たまたま』知ることになった世界と、そうじゃない世界」という分け方**をすれば、海外経験の有無に関わらず、開発教育や他者理解につなげていけるのではないかと思います。

教材としても活用できる「みんなの学校」プロジェクトの情報はこちら
JICA Magazine記事(2022.6)地域住民が子どもを応援する「みんなの学校」
ポッドキャスト#07「学校は、みんなで作るもの」
アフリカを題材とした開発教育用教材はこちら
「みんなが知らないアフリカのこと」シリーズ(ページ下部)

「自分は日本の田舎で高卒の両親に育てられ、公立学校に通い大学を出たら就職超氷河期だった世代ですが、協力隊でたまたまアフリカの開発に携わるようになり、何もできない絶望の中で四苦八苦しながら自分にできることを見つけた時、この土台となるスキルを養ってくれたのは日本の公教育（特に小中学校）だと気が付き、心から感謝しました。同時に、アフリカでは、生まれた途端人生の選択肢が限定され、挽回のチャンスとなる教育も受けられない人が多いことにも気がつき、そういう世界の在り様にとても腹が立ったんです。それで何かできないか、と。」岩田さんが教育協力に携わるきっかけは、こんな気付きだったといいます。いつもと違う何かに目を向け、新たな気付きから学びをつくるきっかけとして、ぜひJICA教材もご活用ください！